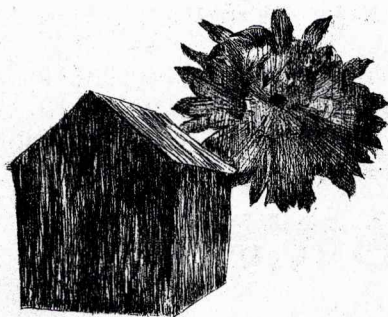


朝日 歌壇 俳壇



〈ガーベラと家〉 岩尾恵都子

うたをよむ おどろおどろ

相子 智恵

加藤敬郎、田川飛旅子に学び、現代俳句の第一線を歩み続ける中村和弘。八十年代にして、十二年ぶりの句集『荊棘』(ふらんす堂)が刊行された。人間の影こそ荊棘夜の秋

和らぎ、藪に奇妙な安らぎがもたらされる。『荊棘』の漢字の効果で、単なる人間批判を超え、人間と草木が暗闇の中で交じり合うような不思議な読後感がある。本句集は、生物が生きているがゆえの非情さが淡々と描かれ、生きている匂いが濃い。最近の句集の中では、屈指の骨太さだ。キリンの脚の巨き関節夏に入る

炎屋の風に乳房ありて死す
キリンの脚に見る生命力、母屋の死。氷片を鉄んでおりしバラバガニ

記者サロン「馬場あき子さんと振り返る 朝日歌壇の半世紀」 馬場あき子さんの退任を記念したイベントを4月19日午後2時から朝日新聞東京本社で開催します。募集する短歌(自由詠)の締め切りは3月20日(希望者のみ)。定員100人。4月25日からオンラインでも視聴可能。紙面購読者は無料で申し込みます。申し込みはQRコードから。

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のほかは1枚に1作品、横住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(週に2作品まで)。QRコードから。

大甲 章選

豪雪の怒りの心へ詩の心へ
(吹田市) 村上 永
亡き父の軍歌哀しや建國日
(東京都中央区) 久塚 謙一
被爆者の八十年や春を待つ
(福島県伊達市) 佐藤 茂
風高く揚げる子の眼の輝けり
(盛岡市) 福田 栄紀
供花めく円墳に咲く水仙花
(熊谷市) 小暮 肇
糸糸編むやうに記憶を編みなほす
(松山市) 杉山 望
☆戦争をしている国へ鳥帰る
(新庄市) 三浦 大三
雪うさぎ溶けて真つ赤な実が二つ
(東京都葛飾区) 小林 容子
河豚鍋や笑いの絶えぬ旅の宿
(岸和田市) 宇野 京子
虚子立子徳ふ椿の咲きにけり
(泉大津市) 多田羅初美

【評】第1句。豪雪は人々の心を揺るがす。感情移入の詩歌を数多く生み出す。第2句。「軍歌哀しや」が切ない。亡くなられた父上は建國の日を紀元節と言った時代の方であろう。第3句。今年は戦後80年。核戦争の無い平和な春を待ち望む。

高山れおな選

鳴きやまぬ塀の鴉や多喜二の忌
(北九州市) 松本ゆきこ
何もなき春とは言えど春待ちて
(調布市) 奈良井 潔
山川の寛たにたゆたに太郎月
(京都市) 室 達朗
それぞれの頂ありて山笑ふ
(袋井市) 谷口 史恵
絶唱の口を揃へて落椿
(前橋市) 荻原 葉月
☆佐保姫の来て廃園を明るうす
(尼崎市) 吉川 佳生
響屋の臺の中に春眠す
(東村山市) 高橋 喜和
やまなみの夜を濡らしたる春の月
(朝倉市) 深町 明
耳遠き耳に耳鳴り春寒し
(所沢市) 小林 貞夫
梅東風や二条城から吹き出づる
(章津市) あびこたろう

【評】松本さん。それほど読まれているわけでもない多喜二の忌日の不思議な人氣。不吉で印象的な句がまた一つ。奈良井さん。源実朝の「勝つて今宵明けなほ行く年の思ひ出もなき春にや逢はなむ」を連想。実朝忌も非業の死ゆえの人氣季語。

小林 貴子選

啓蟄や若者たちは風媒花
(諫早市) 麻生 勝行
「きれいに書けば風光る
(新居浜市) 越智 勝利
甘酒にジャズで舞臺上機嫌
(大津市) 戸澤みのる
麻痺の手も爪は伸びたり春隣
(須賀川市) 伊東 地肌
難逃れの珈琲飲んで梅を見に
(東京都中野区) 吉田 徹夫
投句する今日は天皇誕生日
(相模原市) 金澤 紀六
八十歳まだ生乾き日向ぼて
(柏市) 篠原 申八
刺すような春三日月の先が好き
(横浜市) 浅井 春夫
一限目うちの組だけ雪合戦
(奈良市) 小山寿美代
馬車道や並んで歩きたけの春
(小田原市) 岩瀬 和信

【評】一句目、風に吹かれて花粉が飛ぶように、ふわふわと恋せよ若者よ。二句目、「風」の字の一、二画目に心を込めて春を呼ぶ。三句目、難逃の面々もジャズを聞き、いい気分で共にスイング。四句目、ハッとさせられる事実が心に刺さる。

長谷川 耀選

人類の一步が崩す霜柱
(横浜市) 秋元 和子
探梅行心ときめく曲がり角
(茅ヶ崎市) 藤田 修
白魚は伊勢素魚は志摩に汲む
(津市) 中山 道治
蛤飯の車内にかをる春の旅
(いわき市) 岡田由紀子
ゼレンスキー泣く故国の山笑ふ
(松山市) 河村 俊作
トランプのやる事なす事班雪
(豊前市) 三原 逸郎
☆戦争をしている国へ鳥帰る
(新庄市) 三浦 大三
☆佐保姫の来て廃園を明るうす
(尼崎市) 吉川 佳生
そこそこ死が転がれりガザの春
(筑紫野市) 二宮 正博
雪たるま並べて地蔵の代はりとす
(酒田市) 野澤 勝

【評】一席。「人間の」なら、ただごと俳句。人類の存在そのものが地球を壊している。二席。ときめきと失望と。探梅は冬の季語。三席。今年も伊勢から白魚の句が届いた。素魚は別種。十句目。お互いに驚くだろう。そして笑うだろう。